

「しのびね物語」ところどころ

大 槻 修

序

「月詣和歌集」「和歌色葉」に名が見え、「風葉和歌集」に和歌三首を入集している古本「しのびね物語」はすでに散佚し、

その改作と覚しい現存「しのびね物語」の成立は、一般に「風葉和歌集」撰進の文永八年（一二七二）以後と考えられている。

いわゆる「はかなげな女の悲恋の物語」の系譜に立ちながら、

「あさちが露」「木幡の時雨」の女君たちと同じく、この作品の女君も、ともあれ後半生は世俗的にせよ幸せが巡り来て、ハッ

ピーエントに終わる、つまり「後に幸せを憫む女の物語」に変わらざる過程は注目されよう。⁽²⁾ 本稿では、桑原博史氏の分類によ

る第一系統本に属する筑波大学蔵本を底本に、都合によっては第二、第三系統本をも参照しながら、その成立年代、また時代背景などにかかわる特異な語句の抽出を含めて、いささか特徴的な面を掲げてみたい。

注—以下の引用本文は、底本（筑波大学蔵本）の本文を、適宜漢字に直し、仮名遣いを改めたが、その場合、本文表記を振り仮名の位置にとどめた。また活用語尾等を補った折は、同じく振り仮名の位置に●印を設けた。なお私意に「」や句読点・濁点を付けている。

其の頃、時の有職と世にののしられ給ふは、内の大殿の四位の少将とかや、まことに光かがやき給ふ御様は、明け暮れ見奉る人さへあかぬ心地するに、ましてほのかにも見奉る人の、あちきなき思ひの種となるはことわりぞかし

(一・オ)

以上は物語起筆部分に当り、時・所・人の説明から入る原則的な定型冒頭様式に依っている。いうまでもなく「源氏物語」後のいわゆる中世王朝物語群の起筆・冒頭部分は、「狭衣物語」「夜の寝覚」的な技巧を持つに至る面が強いが、本作品の場合には「今とりかへばや」の起筆等をも含めて、改作という問題点からも一考を要する点であろう。(5)

いまは男君の身分官職について触れてみたい。例えば「夜の寝覚」の場合、男君始発の地位は権中納言兼中将、時に父殿は関白左大臣であった。「狭衣物語」では二位中将、父殿は関白。「今とりかへばや」では三位中将から中納言兼左衛門督(男装であるが)、父殿は関白左大臣であった。くだって「有明けの

別れ」を見ると権中納言兼右大将(男装)、時に父殿は左大臣。「あさちが露」では二位中将、父殿が関白。「木幡の時雨」の男君は中納言、父殿関白。「恋路ゆかしき大将」では右大将、父君は関白左大臣であった。

こうしてみると、本物語の男君(実名「きんつね」という)の始発が「四位少将」、かつ父殿の「内大臣」というのは、いかにも低い身分官職といわざるを得ない。もともと物語主人公の始発の地位と父親のそれとの関係および年齢などを調査するに、時代が平安後期・鎌倉と下降するに従って、次第に身分の低下、年齢の若年化する傾向は否めない。(6)ともあれ、本物語の起筆部分でもあり、注目しておきたい。

二

前掲引用本文に「あちきなき思ひの種」という一節がある。男君のすぐれたお人柄と美貌ぶりに、囲りの女たちが想っても甲斐のない胸の悩みに身をこがすくだりである。こうした使い方としての「思ひの種」は、「源氏物語」「狭衣物語」「夜の寝覚」「浜松中納言物語」「松浦官物語」「有明けの別れ」「あさちが露」などの諸作品に見当らず、今は

・我も知らばや衰き人の、心の中やいかならん。何時の日
の何時か、思ひの種となりぬらむ。 (恨の介・下)

一例を報告し得るのみである。あるいは「お伽草子」近くにな
つて現われた語か。なお「しのびね物語」には、もう一例ある
(第六項参照)。

三

・人の見ぬ方の簀子に尻かけてながめ居給ふに、大人しや
かなる声にて、「いと艶なる匂ひかな。いづくより吹きく
る風にや」といへば、 (一・ウ)

右本文は十月頃のある日、男君が嵯峨野の紅葉狩りを楽しむ
途中、由緒ありげな小柴垣の中から素晴らしい琴の音を耳にし、
暮れゆく女君の邸の簀子に腰かけ、何人ならむと興を湧かす糸
である。文中「大人しやか」(落ち着いてしとやかな)なる語は、
やはり「源氏物語」「夜の寝覚」「狭衣物語」「浜松中納言物語」
「有明けの別れ」「あさちが露」等の王朝物語系列の作品に見出

し得ず、むしろ、

・只今までは別の事も候はず。いつしかたれくも御恋
しうこそ候へ」と、よにおとなしやかにかき給へり。

(平家物語・巻第十二・六代)

・さこそあるらめ。おさなけれども心おとなしやかなるも
のなり。こよひかぎりの命とおもひて、いかに心ほそかる
らん。 (同)

など「平家物語」に四例、また

・西方極楽に往生し、父御前と一蓮に生れあひ奉らんと思
ふべし、とおとなしやかに宣へば (保元物語・下)

と「保元物語」に見出せるなど、概して宮廷女流文学の系列と
は異ったジャンルの作品に使われているようである。そういえ
ば「あさちが露」にみえる「向への院」五例も、「平家物語」
に頻出するなど、用語の面における一つの段階を示しているよう。

四

●目のかすみで小さき文字は見えぬこそいとあはれ。つも
年のしるしにこそ。火あかかかげむや (二・ウ)

右は「四十あまりなる尼君」(実は女君の母に当たる)が、ものに寄り臥して絵物語を見ながら、思わず老いの身をかこつくだりである。一般に「露が立ちこめて」かすみ用例は王朝作品では枚挙に暇なく、改めてその例を挙げるまでもない。ただ、視力が衰えたり、目に故障があつて「かすんで見える」用例は、「源氏物語」など系列作品には出てこない。

・目も見え侍らぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ、
とて見給ふ。 (源氏物語・桐壺)

といった使われ方だが、一方「日ボ辞書」に「目が翳む」(Mega casumi)と登録されている。なお「御老体にて、御手も振り、御目もかすみ候へども」(運如上人御一代問書)が紹介されている程度ではなからうか。

五

●いとど心の闇にさへ見苦しく侍るを、いまちと思ひ静め
て、ともかくも聞こえさせむ」とのみ答へ給へば (六・ウ)

尼君と対面した男君が、姫君との対面を執拗に求め、仕方なく重い口を開いた尼君の返事を描いた条である。「いましばらく、ゆつくり考えた上で」の中に「ちと」なる語がある。既に触れた機会があるが、「あさちが露」に、「人のおはする程に、ちと遊びて参らむなどいひて、のこりの人々いでぬ」とあり、また「いはでしのぶ」「住吉物語」「石清水物語」などの作品に散見する特異な用語である。が、前述「大人しやか」の例にも似て、「平家物語」では「ちと」「ちつと」のケースを含めて二〇例にのぼる頻出ぶり。またキリシタン関係では「伊曾保物語」下にも見えている。なお「しのび物語」全文に

・いまちともおはせて、みづからは心安く侍らむ。世のわ
づらはしきこそ苦しけれ。 (二八・ウ)

など計七例(三系統の諸本合わせて)見られる。

六

●ただいまは心うつろうべくも覚えず、若君うちあひして、一期はかくて暮らすべきものと思し召すぞ御ことの思ひの種とあぢきなき。(一三・ウ)

誕生した若君も早や二歳。そのいじらしさは何に譬えようともなく、「いかに立派な皇女を与えようと仰せあつても……」と、生ける限りはこの暮しを続けようと念ずる男君の心を描いた条である。「二期一会」とも用いられ、一生・生涯を意味する「一期」だが、やはり「源氏物語」「狭衣物語」「夜の寝覚」「有明けの別れ」「あさちが露」「松浦宮物語」等には用例がなく、いわゆる王朝物語系列の作品にとつて異質の語と思われる。一方「ロドリゲス大文典」には、「一期」(Ichigo)とあり、例文として Ichigo no arida (一期の間) と記されている。「日ボ辞書」も同型である。また「平家物語」の用例を検すると、

・僧都一期の間、身にもちるる処、大伽藍の寺物佛物にあらずと云事なし。(平家物語・卷第三・有王)

・そのふるまひをみるに、一期の栄花猶あやうし。(同)

・栄耀又一期を限(ツ)て、後混の恥におよぶべく(シ)ば、(同)

・余命いくばくならぬ一期の内(に)だにも、や、もすれば、(同)

・此人一期の高名とおぼえし事は、近衛院御在位の時、(同、法印問答)

・一期が間のおもひでひとつあるべし」とて、花方がつら(卷第4・鶯)

に、(卷第十・讀文)

・大師の御ひざにおしあてられたりければ、其手一期があひだかうばしかりけるとかや。(同・高野卷)

・仍年来の愁眉を開き、一期の安寧を得ん。(卷第十一・腰越)

・聖が申さむ事をば、頼朝が一期の間はかなへん」とこ(卷第十二・六代)

その給ひしか。(同)

・但頼朝一期の程は誰か傾べき。子孫のするぞしらぬ」との給ひけるこそ、(同・六代披新)

・建久二年きさらぎの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ。

(灌頂・女院死去)

と、十一例の多きを数える。また「保元物語」「義経記」にも用例あり、仏教用語ながら概して戦記文学に多用される傾向にある。なお「徒然草」から一例示しておく。

・おほやう、人を見るに、少し心あるときは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。
(徒然草・第五十九段)

七

・総じてこの大殿は、御心きらきらしくはなやぎ給へる人にて、世にすぐれ給へる人を思しおとしける本性にこそ、
(三五・才)

内大臣の策謀により、邸を出た尼君と女君は由縁の典侍を頼り、その局に身をおちつける。これまでの事情を尼君から聞いた典侍が、内大臣の性分を批判するくだりである。一般の用例

を検索するに「平家物語」「太平記」が掲げられている。

・惣じて一門の公卿十六人、殿上人卅余人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十余人なり。

(平家物語・巻第一・吾身栄花)

・そうじて四人、ひとつ車にとりのつて、西八條へぞ参りたる
(同・祇王)

・惣じて源平乱あひ、入かへく、名のりかへくおめきさけぶ声、山をひゞかし、
(同・巻第九・坂落)

・惣じて鎮西のもの、義経を大将として其下知にしたがふべきよし、
(同・巻第十二・判官都落)

・捨ジテ諸国七道ノ軍勢我そくと馳上リケル間、京白河ノ家々ニ居余リ、
(太平記・巻第六・関東大勢上洛事)

すでに述べた「大人しやか」「ちと」「二期」の場合と組み合わせる興味深いものがある。

八

その後、典侍は局にいる女君のことを帝に語り、それが結果

的には帝の寵愛を彼女が一身に集めるきつかけとなるのだが――。さて依然として続く女君の嘆きに困惑した典侍が、男君への想いを諦め、宮仕えを勧める。だが女君は捧げる慕情の切なさから出家を願うくだりを示す。

・憂うれきに紛まれぬ恋しさの、寝れば夢、覚むれば面影おもかげたち添そひて、忍しのばむとすれど忍しのばれぬを、
(四〇・ウ)

「寝れば夢、覚むれば面影たち添ひて」は然るべき歌に依ったものか。「壬三集」後度百首の恋に

ぬれば夢さむれば向ふ面かげになれてもよその物思へとや
の一首がある。「壬三集」はいうまでもなく藤原家隆の家集で、八十年の生涯における主要作品をまとめたものといわれる。保元三年(一一五八)に生まれ嘉禎三年(一一三七)の没。仮りに「しのびね物語」本文が、この家隆の歌を取り込んだとして、思い出されるのは。

・顔かほに袖そでを覆おほひてひきもはなたねば、「こはいかに。問ふ

につらさのまさるとかや、ことわりぞ」とて (四九・ウ)

の一節である。旧稿に詳しいので略記にとどめるが、⁽⁹⁾「問ふにつらさのまさる」は「続古今集」巻十八に、「建長三年九月十三夜十首の歌合に、山家秋風」と詞書して入集された藤原定雅の歌

吹く風もとふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里

を引歌とするものであろう。ともども物語改作の時期、古本の問題を含めて注目される。もつとも現代において「寝ては夢さめてはうつつ幻の……」と口誦くわくされるように、これは一種の慣用語化したセリフに過ぎず、家隆もまた往事のそれを取り込んだとすれば話はまた別である。

九

女君の失跡後ずっと悲嘆にくれる男君の姿を見た帝は、もしや恋の相手が、典侍を頼ってきた例の女性か、と思われて、半ば妬ましく半ば気の毒に感ずる条に、

・われも女ならましかば、中納言には、いかなる蝦夷が島までも慕ひ行くべき心地こそすれ
(四三・ウ)

とある。蝦夷が島は蝦夷が千島とも呼ばれ、北海道・千島・樺太の総称であったという。王朝物語系列には絶えて見られぬ用語で、やはり中世軍記物語に散見する。

・東は阿古流や津軽・俘囚が千嶋なり共、左府住としりなば、駒に鞭をも打ぬべし。
(保元物語・中・左府御最後)

・「たとひゑぞが千嶋なりとも、甲斐なき命だにあらば」との給ひけるこそ口惜けれ。
(平家物語・卷第十一・腰越)

・当代には、いさ、かも悪事をする者は、蝦夷が千島へいたりても、その科のがれず、
(曾我物語・卷第四)

・北は北山、佐渡の島、東は蝦夷の千島までも御伴申さんずるぞと申しも果てず、
(義経記・卷第五・忠信吉野山の合戦の事)

中世末期には北海道を蝦夷が島と呼んだといわれるが、いずれにしても遠国である。譬えの例として想起されるのは、「荒き

夷」「奥の夷」なる用例である。すでに説かれる所だが、「源氏物語」では

・いとどなまめかしう清らにて、物をおぼいたるさま、虎狼だにも泣きぬべし。
(源氏物語・須磨)

と形容されていたが、前九年・後三年の後ごろから、東国の武将たちによる動乱が都内の噂を呼び、譬えの用語も、

・ながめがちに結ばはれたるさま、いみじからむ陸奥の夷なりとも、げに泣きぬべし
(有明けの別れ・卷二)

・いみじからむ荒夷も泣きぬばかりに、あくまでなつかしう、心苦しき気色を
(浜松中納言物語・第四)

のように変貌したという。こうした用い方は他に「狭衣物語」「夜の寝覚」「とりかへばや」「木幡の時雨」など枚挙に暇がない。「陸奥の夷」に対して「蝦夷が千島」はさらに遠国である。それにしても「しのびね物語」に第三、五、六、七項と併せて、こうした軍記物に頻出する語が多く用いられていることは注目し、むしろ（引用本文の中で「源氏物語」の場合、河内本系は「鬼

神」となっている。また「しのびね物語」では第三系統本のみ「虎
伏す野辺（とらふす都へ）」とする。（未完）

注（1）拙稿「しのびね物語の改作態度」（甲南女子大学研究紀
要 第10号）同「はかなげな女の恋愛の物語」（同、創立十
周年記念号）同「蓬左文庫蔵しのびね物語」（昭53・9月刊、
和泉書院）の解説などを参照されたい。

（2）注（1）参照。

（3）桑原博史氏「中世物語の基礎的研究」（昭44・9月刊、風
間書房）。

（4）小久保崇明・山田裕次氏編「村枝しのびね物語」（昭60・
5月刊、和泉書院）が便利である。

（5）拙稿「平安後期・鎌倉時代物語の多様性」（鑑賞日本古典
文学 第12巻 昭51・12月、角川書店刊）参照。

（6）原田（現姓米田）明美氏「有明の別成立年代試論」（中古
文学 24号）が参考になる。

（7）拙著「あさちが落の研究」（昭49・6月、桜楓社）参照。

（8）注（7）参照。

（9）注（7）参照。

（10）拙著「在明の別の研究」（昭44・10月、桜楓社）。

なお「しのびね物語」全文の丁寧な口語訳として「訳注しのび
ね物語」上下（古代中世国文学 4・5号）が便利である。